

岩手大学教育学部附属小学校 研究のまとめ (H22～H25)

岩手大学教育学部附属小学校 教諭 板垣 健

平成22年度 学校公開研究会 6月18日(金)

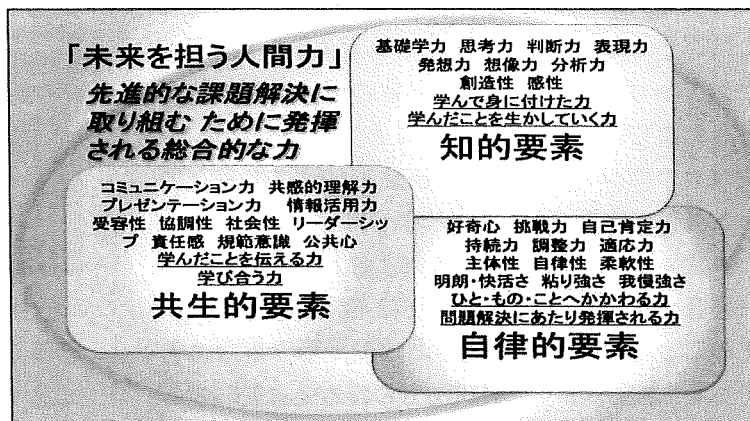
「未来を担う人間力はぐくむ学びの創造」(第一次研究)

～確かな力を身に付け、かかわりの中で自己のよさを発揮する子どもの育成～

1 人間力を構成する要素と目指す子ども像

未来を担う人間力を「先進的な課題解決に自ら取り組むために発揮される総合的な力」と定義した。また、それを構成する要素を「知的要素」「共生的要素」「自律的要素」とし、構造化した。

そして、育てたい子ども像を「確かな力を身に付け、かかわりの中で自己のよさを発揮する子ども」とした。具体的には、以下のような子どもの姿をとらえた。



- 知的好奇心、探究心、学ぶ意欲をもち、論理的思考力・表現力、判断力を身に付け、課題解決に主体的に取り組む子ども
- 自分と異なる意見や考えを認め、新しい価値を付け加え、能動的に受け取る子ども
- 自分らしい発想や行動に自信をもち、自ら進んで活動する子ども

以上のような子ども像を踏まえ、各教科・領域で「目指す子ども像」をとらえた。そして、各教科・領域の本質に迫るための手立てを教育活動に組み込み、授業の中における子どもの姿から学びを創造しようとして取り組んだ。

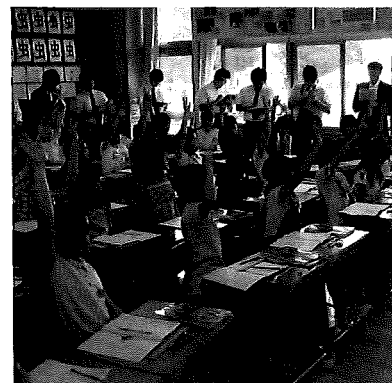
2 成果と課題

(1) 成果

- ・単元の学習目標や学習活動に関する情報が共有される場、相互の考えを交流したり伝え合ったりする場やかかわりを深める場、成果や評価を認識する場などを設定すること、発見や解決の必然性がある学習材・問題提示の工夫などが、未来を担う人間力をはぐくむ学びの条件となることが明らかになった。
- ・教育課程の基盤となる各教科・領域の実践を積み上げ、発達段階に応じて系統的に整理し、指導の重点を明らかにした実践事例集を作成することができた。

(2) 課題

- ・より確かで豊かな人間力をはぐくむための具体的な学習場面と指導法を追究すること。
- ・各教科・領域の学びのつながりを、学級経営という視点から実証的に検証すること。



学校公開研究会 (6月18日)

平成23年度 公開授業研究会 10月28日(金)
 ～国語、算数、体育、英語活動、複式指導～

1 趣旨

国語・算数・体育・英語活動・複式指導の研究の充実と発展を目指し、研究授業と授業研究会を通してその成果と課題を明らかにする。

2 公開授業

- (1) 国語 1年「くらべて読もう (じどう車くらべ)
5年「説明のしかたについて考えて読もう (天気を予想する)」
- (2) 算数 5年「比べ方を考えよう (百分率とグラフ)」
- (3) 体育 1年「体づくり運動～めざせ! 附小スーパーキッズ～」
5年「体づくり運動～AKB38人～」
- (4) 英語活動 1年「物語を楽しもう (大きなかぶ)」
3年「アメリカを旅しよう (TULIP SEES AMERICA)」
6年「自分の生活を紹介しよう」
- (5) 複式指導 1年算数「かたちあそび」・2年算数「三角形と四角形」
5年理科「流れる水のはたらき」・6年理科「大地のつくりと変化」

3 授業研究会

学部共同研究者	
国語	岩手大学教育学部 教授 藤井知弘先生
算数	岩手大学教育学部准教授 山崎浩二先生
	講演 「全国学力調査の結果から授業改善の方向性を探る」 岩手大学教育学部准教授 立花正男先生
体育	岩手大学教育学部 教授 清水茂幸先生
英語活動	岩手大学教育学部 教授 山崎友子先生
	岩手大学教育学部准教授 ジェームズ・ホール先生
複式指導	岩手大学教育学部 教授 名越利幸先生

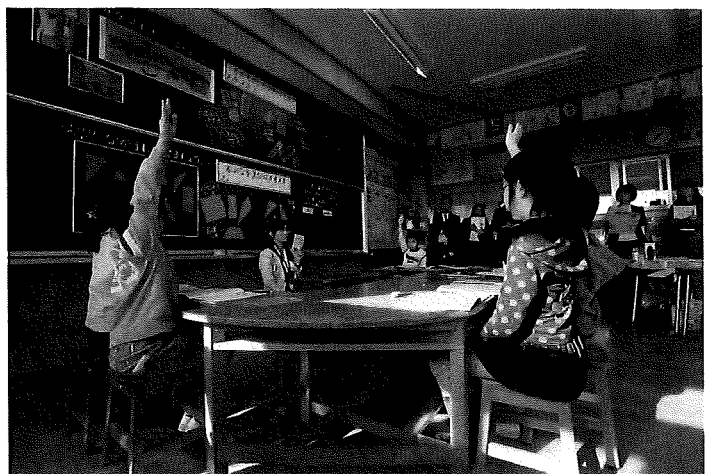
4 成果と課題

(1) 成果

- ・それぞれの教科及び複式指導における授業力向上の方向性、課題や要望を確認することができた。

(2) 課題

- ・運営に関して、隔年で行っている学校公開研究会(6月)との趣旨の違いを明確にすること。



公開授業研究会 (10月28日)

「未来を担う人間力はぐくむ学びの創造」（第二次研究）

～学びを結び付ける教育活動の充実・改善～

1 学びを結び付けることの意義

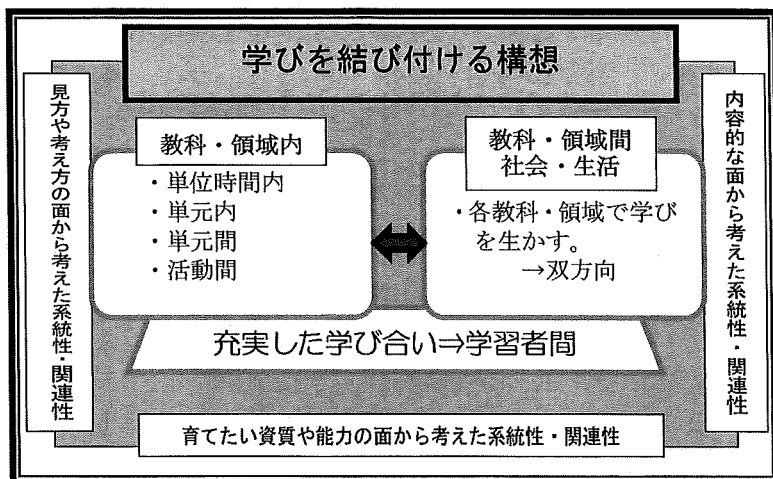
未来を担う人間力をはぐくむためには、学校教育全体の中で、教科・領域の特質を生かしながら「知的要素」「共生的要素」「自律的要素」をバランスよく高めていく必要がある。

そのために、私たちは「学びを結び付ける」という視点を強く意識していくことで、教育活動の充実・改善を目指したいと考えた。「学びを結び付けること」のとらえは、以下のとおりである。

教師が、教科・領域の特質をとらえながら、教育活動の中で行われている様々な学びの系統性、関連性を意識し、意図的な働きかけによって学びの構造を強化すること。さらに学習者である子ども自身が、学び合いの中で他者のよさを柔軟に取り入れ、お互いの考えを高め合いながら、それまでに身に付けた知識や技能、見方や考え方等を、問題解決に向けて主体的に関連付けていくこと。

2 学びを結び付けることの基本的な考え方

各教科・領域においては、その特質をとらえ、主に「内容的な面から考えた系統性・関連性」「育てたい資質や能力の面から考えた系統性・関連性」「見方や考え方の面から考えた系統性・関連性」等の視点で、結び付きを構想した。また、それぞれの結び付きは、大きく「教科・領域内での結び付き」「教科・領域間での結び付き」「社会・生活との結び付き」の3種類に分けられる。私たちは、上記の構想をもとにしながら、教科・領域内の結び付きにおいては、「単位時間内」「単元内」「単元間」「活動間」の結び付きを考えた。



他教科・領域や社会との結び付きにおいては、各教科・領域で学びを他教科・領域や社会・生活に生かしていくことで、双方向の結び付きが生まれ、子どもたちの学びがより確かなものになると考えている。そして、これらのことは「充実した学び合い」の中でより強く働き、学習者である子どもと子どもを強く結び付けることにもつながってくる。

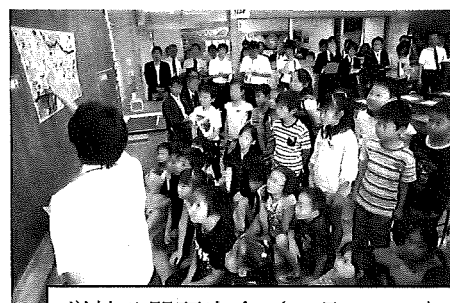
3 成果と課題

(1) 成果

- 子ども同士の考えをより強く結び付けることで、自分とは異なる意見や考えにも耳を傾け、自分の考えを広めたり深めたりする子どもが増えた。

(2) 課題

- 子どもが自らの学びを振り返り、新たな目標や課題をもって学習を進めていくことができるような評価の在り方を追究していくこと。



学校公開研究会（6月22日）

統一テーマ「今、言語活動の在り方を考える」

1 はじめに

平成25年度は、これまでの研究のさらなる充実と現在の教育課題の克服を目指し、各教科・道徳を貫くテーマを設定のもと、授業提案を行った。

なお、現在の言語活動の課題として、以下のことが挙げられていた。

□指導のねらいと言語活動との関係がはっきりせず、当該教科等のねらいに応じてどのような力がついたのか不明確な場合がある。

□時間がかかることや、指導のポイントがつかみにくいことなどから、言語活動の位置付けを躊躇してしまう場合がある。

□学習評価との関係をどのようにとらえるかが不明確なまま指導がなされる場合がある。

初等教育資料6月号(通巻901号)「言語活動の充実の趣旨と実施上の課題」水戸部修治 氏より引用

2 言語活動の在り方を考える具体的な視点

テーマを貫く視点は、「子ども主体の言語活動になっているか」である。つまり、言語活動の「質」を大切にすることである。具体的な視点は、以下の3点である。

(1) 子どもに明確な目的意識をもたせているか。

- ・ 単元(題材)及び本時のねらいと結び付いた目的意識(問題意識・課題意識・興味、関心等)をもたせるために具体的な手立てがあること

(2) 言語活動を通して、他者と共に学ぶことのよさを実感させているか。

- ・ 創り上げていく過程、発見していく過程を重視し、生み出されたよりよい見方・考え方・表し方を共に価値付けるための手立としての言語活動を重視すること。

(3) 言語活動の成果として子どもに何を求めるのかが、具体的に明らかになっているか。

- ・ 何をどのように考えたり、選んだり、説明したりできればよいかを明らかにすること
- ・ 活動の過程で適切な指導のもと、考えを深めていくこと

以上の視点をもとに、まず各教科・道徳の授業改善と充実を図る。そのためには、各教科・道徳の特質を生かした学びの強化を図ることが大切であると考えた。

3 成果と課題

(1) 成果

- ・ 各教科の特質を大切にしながら、手立ての一つとしての言語活動の在り方を提案することができた。
- ・ 言語活動の位置付けを明らかにして授業を構想することで、評価の充実を図ることができた。

(2) 課題

- ・ 今回の成果を第三次研究における研究内容と結び付け、研究のさらなる充実と発展を図ること。



公開授業研究会(11月22日)

まとめ～今後の方向性～

1 教育の今日的課題から

現在の子どもたちが担う未来の社会には、地球温暖化をはじめとする環境問題、石油の不足や発電などのエネルギー問題、人口増加あるいは少子高齢化など、解決困難な課題が待ち受けている。これらの課題は一筋縄では解決することができない。また、過去の学びや経験から導き出されたものを超える事態があるのが未来の社会である。

そういった未来社会を生き抜いていくためには、さまざまな立場に立って、いろいろな角度から考える力、問題解決能力が必要になってくる。つまり、知識や情報を得るだけでは不十分である。問いをもち、因果関係や構造を理解したり、新しいものを創り上げたりする学びが必要になってくる。そういった学びを途切れることなく続け、積み上げることによって確かな力を身に付けていく。

また、地球規模で物事を考え、あらゆる地域の多くの国々が協調して課題に立ち向かっていこうとする姿勢が重要になってくる。なぜなら、子どもたちの未来に待ち受けている課題は、自分の国だけよければいいというレベルの問題ではないからである。つまり、多くの人と共同して課題に立ち向かっていく「共生」の考え方が不可欠になってくる。

2 岩手県の子どもが置かれている現状から

平成24年度の学校公開研究会は、日本における復興元年の年、被災地岩手の復興教育の初年度にあたる年に研究成果を発表した。10年後、20年後の岩手の復興、日本の発展を担う子どもたちを育成するという使命を自覚し、学びを結び付けることで確かな力を身に付けさせることが、復興教育の具現化につながると考えた。

あの大震災から3年が経過した現在、大切なことは、常に過去を振り返り、現在に生かし、さらに将来に向けてよりよい学び方や生き方を追求し続けていく人間を育てることだと考える。それはまさに、本校の学校教育目標の「未来を切り拓く人間」そのものである。

そこに向かって、小学校教育で培っていきべき力は、未来を担う人間力、つまり先進的な課題解決に自ら取り組むために発揮される総合的な力と捉える。そういった力があれば、自分自身の人生を切り拓いていくことはもとより、共生社会においても様々な問題を解決していけるエネルギーにもあり得るだろう。また、一人一人の生涯学習を支える礎にもなるものと考えている。

以上のことから、過去の経験や学びから未来の姿を見つめ、他者の感じ方や考え方を積極的に受け入れながら、よりよい社会を築いていくための資質や能力を身に付けていくことが重要になってくる。

つまり、「共に追求し続ける学び」を実現することは、本校の教育課題を解決するだけでなく、これからの社会を生き抜いていく子どもを育てる上で必要なことなのである。また、復興に資する人づくりを実現する上でも価値のあることであると考えている。

